

【2026 ワールドカップ・バクー大会 1日目】

開催日：2026年4月17日～19日

開催地：バクー（アゼルバイジャン）

ワールドカップシリーズ第3戦となるバクー大会が開幕する。本大会には、個人81名、団体16チームが出場予定であり、シーズン序盤の連戦を経て、各国の完成度や調整力がより明確に問われる大会となる。

日本チームは、前戦タシケント大会で得られた課題と成果を踏まえ、団体においては本大会に向けてバクーにて事前合宿を実施し、技術面およびチームとしての連携強化を図った上で本大会に臨む。

個人にはナショナル個人強化選手の岡田華英選手が出場。国際舞台における安定した実施と得点の積み上げが求められる。

シーズン序盤における重要な位置づけとなる本大会においては、各国ともに完成度の向上を図りながら、今後の主要大会に向けた方向性を見極める場となることが予想される。限られた試技の中で、いかに精度の高い演技を発揮し、持ち点を確実に得点へと結びつけるかが重要となる。

【個人：岡田華英】

《1種目目：クラブ》

得点：18.850（D10.85/A 5.90/E 5.65 / P0.6）

前日のポディウム練習では、緊張の影響により身体の軸が安定せず、全体的に不安定な実施が見られたが、試合初日においてはその点を一定程度修正し、比較的落ち着いた状態で演技に入ることができた。

しかしながら、クラブにおいては本番直前に再び緊張が高まり、その影響が演技全体に及ぶ形となった。序盤のリスクにおける乱れをきっかけにリズムを崩し、落下および場外を重ねるなど、手具操作の安定性を欠く実施が続いた。後半には立て直しが見られたものの、ラストのリスクにおいて投げが長くなり、場外でのキャッチとなった。

初めてのワールドカップ出場であり、同グループに世界トップレベルの選手が多く含まれていたことも影響し、競技環境に対する緊張やプレッシャーが大きく、国内大会で発揮しているパフォーマンスを十分に示すことができなかつた点は、今後に向けた大きな課題として挙げられる。

【個人：岡田華英】

《2種目目：リボン》

得点：23.100（D 9.40/A 6.90/E 6.80）

リボンにおいては、クラブでの課題を踏まえ修正を試みて臨んだものの、安定した手具操作には至らず、直前までリズム調整に時間を要した状態で本番を迎えることとなった。演技中盤のリスクにおいては回転不足が見られたほか、全体を通して手具が身体に近くなる場面が多く、不用意に身体へ触れるケースが散見された。

また、動きの途切れや音楽とのずれも生じ、演技全体として繊細さや一体感に課題が残る内容となった。

本試技を通じて、国際大会特有の環境下においても、国内同様に自らの力を安定して発揮するためのメンタル面および実施力の強化が必要であることが明確となった。

【団体】

《1種目目：ボール5》

得点：22.750（D 10.40/A 7.00/E 5.35）

本大会はワールドカップ第3戦にあたり、海外での転戦が続く中、環境の変化に対応しながらの調整となった。選手にとってもこのような状況下での連戦は初めてであり、疲労が蓄積する中での試合となった。

演技は序盤から中盤にかけて非常にクリアに進めることができ、全体として整理された内容であった点は評価できる。しかし、中盤において交換の受けを取りきれず落下が発生し、その後のCRでは2名での実施となるなど、ミスが連鎖的に広がる展開となった。さらに、タイミングのずれから複数投げの価値を抜く対応が続き、本来の構成を十分に発揮することができなかった。

加えて、同一選手によるリスクの取り損ねにより大きな落下が発生し、その直後のCRを実施できない状況となったほか、終盤の交換においても価値を抑えての実施となるなど、ミスが連続する形となった。演技全体としては安定した流れを作れていただけに、これらの落下が結果に大きく影響した点は大きな課題である。

特に、ミス発生直後に次の技へ与える影響が大きく、即座に立て直すことができていない点は、本チームにおける重要な改善ポイントである。通し練習やミス対応のトレーニングを重ねているものの、試合の中で十分に発揮できていない現状があり、実戦を想定した対応力のさらなる強化が求められる。

また、身体難度においても課題が見られ、フェットバランスやフェットターンに対する評価が厳しくなる中で、実施精度の向上が必要な状況である。加えて、演技全体として整理され

た印象はある一方で、動きや技のボリュームにおいて不足が見られ、得点の伸び悩みにつながる要因となった。

今大会でシリーズ第 3 戦目を迎えたが、第 1 戦から継続してミスが見られており、一定の成長は確認できるものの、いまだミスのない完成された演技には至っていない状況である。現時点では、演技の流れを途切れさせることなく最後まで通し切る「通った演技」を確立できていないことが、得点の安定化を妨げる要因となっている。

明日に向けては、本日の課題を整理し、一つひとつの技を確実に実施しながら、最後まで演技を通し切ることを意識し臨みたい。

〈出場選手〉

田口久乃

西本愛実

花村夏実

田中友菜

眞鍋凜

results.smartscoring.com